

青山吉信著

『アーサー伝説』

——歴史とロマンスの交錯——

富沢 靈岸

著者は、従来、イギリス史がアングロ・サクソン一民族史として捉えられていたことに疑問を感じ、イギリス中世史を、他民族とのかかわりを重視する立場から、多民族の形成する国家として発展してきたという新しい視座から見直そうとする。この観点からイギリス中世史を再構築してみた時に、著者がブリトン人とアングロ・サクソン人との出会いの中で、たちまち遭遇したのが「アーサー」であった。

爾来、著者は「アーサー」解明に打込んで来られた。評者は著者からアーサーの興味深い問題を私的にうかがう機会が多かったが、その問題の重要性とともに、著者がひたむきな情熱を傾けておられたその傾倒ぶりに敬服したことを思い起すが、著者が文字通り寸暇を惜しんで積み重ねて来られた「アーサー伝説」の研究が、こうして立派な著書に結実したことは喜ばしい。今、この著書を読み終えて卒直に感じたことは、著者の該博な知見がきわめてよく整理されていること、これには敬服の外はないが、その裏

側には、著者のこれまでの長い間の並み並みならぬ研鑽があったことを思わずにはおれない。本書には格調の高い文語調の叙述が目立つが、それだけに簡潔にして力強い論述となっている。

著者は、ブリトン人とアングロ・サクソン人との出会いの中でアーサーが生れ、ヴァイキング侵入時代にアーサーの伝説化が進み、ノルマン征服、アンジュー帝国の発展期にアーサーが不死の王にまで高められ、中世後期島国に回帰する時代にアーサーがアングロ・サクソン人のアイデンティティのシンボルとされるという風に、イギリス中世史における他民族との交渉の関連で「アーサー伝説」を捉えようとする。こうした著者の意図の故に、その「アーサー伝説」の論述は、そのまま立派なイギリス中世史となっているという感が深い。本書の構成は、第一篇においてアーサーの歴史性の検討を通じて古代末中世初期のイングランドの空白時代を、第二篇にアーサー伝説の成立と、世界的帝王にまでつり上げられてそれが広く地中海、東方にまで拡大してゆく発展とを、第三篇に一二世紀以後のアーサー伝説と現実の歴史との交錯を論ずるといふ形をとっている。

第一篇「歴史のアーサー」では、まず第一章において、アーサーをめぐるブリトン側の史料、ギルダス『ブリタニアの破壊と征服』、ネンニウス『ブリトン人史』、『アンナレーレス・カンブリアエ』をあげて克明な史料解説をおこない、イースター表の一種としての『アンナレーレス・カンブリアエ』に関連して、当時、アレクサンドリアの一九年周期法を基礎に五三二年周期法をとるヴィクトリウス暦と、同じくアレクサンドリアの算定法を基礎にするが九五年周期法をとるディオニシウス暦とがあつたが、ローマ教

会では次第にディオニシウス暦を採用するようになったこと、そして古くからの八四年周期法をとるケルト系教会と対立していたことが説かれる。こうした紀年法の混乱があったためにイースター表を予め作っておく必要が生じてきた訳であるが、また年の始めを一月、三月、九月の何れにおくかで年代確定には一・二年の誤差の多いことが注意される。

そうした史料解説の後、ケルト人のブリタニアへの来島、ローマのブリタニア支配を、すなわちアーサー登場までのブリタニアの古代史を史料にもとづいて解説される。

ローマのブリタニア支配は三世紀ごろから動揺するが、その中で、いわゆる「サクソンの海岸堡」を建設してブリタニアのローマ的防衛体制を建て直したコンスタンティウス・クロルスの治績が注目され、五世紀前半に到ってもなおローマ的官制がブリタニアにおいておこなわれていたことを *Noctia Dentatum* に見られる。しかし五世紀前半から、ブリタニアにおけるローマ化、都市化の文明は、スコット人、サクソン人などの周辺諸民族の侵襲に苦しむが、五世紀後半のリヨンの聖職者の作といわれる『ゲルマヌス伝』によれば、当時のブリタニアには、ゲルマヌスのローマ的キリスト教の布教がうけ入れられる程度の平和が、ブリトンの地方首長らによって維持されていたとされる。

そして第一章の最後に、いよいよアーサーの登場する時代、アングロ・サクソン人の侵襲の時代が扱われる。ギルダスによれば、その時のブリトン人の最高支配者フォルティゲルンは初めローマに求援してスコット人、ピクト人の攻撃に耐えていたが、最後にはサクソン人を招いて防衛に当たったといわれる。著者はここで、

このローマ支配の最後の時期までブリトン人がローマに求援していたという事実の中に、ローマ的權威の根強い残存がみられることを強調し（五八頁）、五世紀前半から中葉にかけて傳統的に來寇して来たアングロ・サクソン人と、ローマ文明の洗礼をうけていたブリトン人との間に抗争があったが、時々ローマ的ブリトン人が勝利したことをギルダス、ネンニウスについて論ずる。そしてギルダスが語るアングロシウス・アウレリアヌスの下におけるブリトン人の結集とバドニクス丘の勝利に注目し、この二つの事実の関連、とくにギルダスによって名を伏せられているバドニクス丘の勝利者を問題にして、アーサーが実在したや否やの論点に進んでゆかれる。

第二章では、ネンニウスの『ブリトン人史』や『アンナーレス・カンブリアエ』にバドニクス丘でアーサーが戦った記述があるが、バドニクス丘の戦いの年代と場所を五世紀末六世紀初めブリタニア中南部での戦いと推定することは出来るが、ほぼ同時代のギルダスや碩学のベータが記していないアーサーは、果して実在の人物であったか架空の人物であったかを検討する。その場合著者は、R・G・コリンウッドがギルダスの「熊の乗る戦車」という所にアルトス（熊 \parallel アーサー）の名がかくされているという所に注目し、ギルダスが余り人名をあげない手法をとっていることから、コリンウッドの推論は蓋然性が高いとされる（九一頁）。

そしてもしアーサーが実在したとすればどういふ人物であるかについて、ジェフリ・オブ・モンマスのアンブロンシウスの甥ユースターの子とする説を排し、ギルダスの文脈から、アングロシウスの後継者としてブリトン人を率いた人で、アーサー（ \parallel アルトリ

ウス)という名からローマ化したブリトン人、あるいはブリトン人化したローマ人と考え(九九頁)、王とともに戦った軍隊の指揮者、戦士の長と考え(一〇三頁)、『アンナーレス・カンブリアエ』の「カムランの戦い」にメドラウトと戦い共に死んだという条項があることから、ブリトン人の内乱の中で死んだことも考えられるとされる。

アーサーの實在は疑わしいが、しかし架空の人物であるときめつけることも出来ない。著者は広く史料、文献に当って實在、非實在の諸論議をギリギリの所まで追究してゆかれる。その著者の傾倒ぶりには打たれるものがあり、またバドニクスの戦いがサクソン人の進出に大きな打撃を与えたことについて、ビザンツ史家プロコピオス『ゴート戦記』、フルダ修道院のルドルフの記録などから、六世紀前半にアングロ・サクソンの一部が大陸に逆流したという事態があったことを確かめて、それをバドニクスの戦いに結びつけて考えられる際の著者の広い文献渉猟には驚嘆させられるものがある。

以上の第一篇の中で、評者のきわめて主観的な印象からであるが、第一篇中しばしば引用されるジェフリ・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』は第三篇第一節の二に詳細に述べられるが、第一篇の初めの方にも、如何にモンマスが架空のアーサー像を描いていたかを示すために、関係部分だけでも入れて貰えれば読む者に便であったかと思われた。ジェフリ・オブ・モンマスの『列王史』がしばしば出て来るだけに余計にその必要を感じた次第である。

第二篇「伝説のアーサー」では、まず第一章にアーサー伝説の

史料として、ブリトン人固有の心情をとどめているウェールズの四古書とよばれる説話集が重要な材料であるとされて、七・八世紀から一一世紀に至る間のブリトン人の衰退の悲運を、一〇世紀のスコットランド王国の形成、イングランド王国の発展と対照させて説かれる。そして第二章では、ウェールズ四古書にもとづいてアーサーの伝説化の進行を説き、アーサーが大軍の長、王、さらには帝王にまで引き上げられてゆき、悲劇的英雄に伴ない易い不死伝説と帰還・再来の待望をも伴なうようになったとされる。著者が、この間のアーサー伝説流布の起点をブリトン人の現実の悲劇的運命に求め、この時期のブリトン人の民族意識の昂揚がアーサー再生の渴仰と悲願を生んだとされる辺りは著者の情熱をかけた文章で綴られている。

しかしこの間の論述の配列について、第一章第一節における韻文的散文的諸史料としてのウェールズ四古書や聖界伝説の諸史料は、第二章の初めにまわした方が、アーサーの伝説化、不死・帰還伝説を説明し易くするように評者には思われた。というのも、第一章第二節の七・八世紀より一一世紀に至るブリトン人の悲劇的運命こそが、第一章のテーマである(アーサー伝説の)「歴史的諸前提」に当るように思われ、それを先きに出した方が良いと思われたからである。

そしてそのアーサー伝説は、その後ボワティエの宮廷を中心とするトゥルバドゥールによってとり上げられてアーサー伝説のロマンス化が進み、北フランスからイングランド北辺へ、そして驚くべきことにはイタリアからさらにシチリアへ、そして十字軍の波ののってエジプト、アンティオキアにも波及したのであった。

ところで著者は、その伝説を伝えた者は誰であったかを問い、ブリトンの本拠地のウェールズの人びとに果してこのようなロマンス語圏への伝播をなしうる能力があったかどうかを疑い、地中海に出て活躍したノルマン人もウェールズと余り接触がなかったところからそれを排し、一番可能性の高いのは、コーンウォール、ウェールズと同族意識の強かったブルターニュのブルトン人であり、彼らこそが、フランス人の好みに合わせてフランスからロマンス語圏へアーサー伝説を拡大してゆく途を切り拓いたものであるにふさわしいと強調される(一九七頁)は注目されるべきである。またイングランドへの流布も、ウェールズから直接にはなく、北フランスから故国ブリタニアに帰還したという興味深い現象を示唆される(一九九頁)は、誠に心にくいものがあり、アーサー伝説の拡大に関する著者快心の指摘ではなからうかと思われる。またその辺りの著者の叙述の筆は冴え、正に一一・二世紀の世界史ともいふべき叙述にふくらみ、アーサー伝説が一二世紀ルネサンスの原動力の一つとして重要な役割を果していることを示唆されているように思われる。

第三篇「アーサー伝説の歴史化とロマンス化」では、第一章にまず『ブリタニア列王史』がとり上げられる。作者ジェフリ・オブ・モンマスの生い立ちを探り、ジェフリという名前から生粋のウェールズ人でなく、ノルマン貴族ウィリアム・フィッツ・オズバート旗下のさるブルターニュのブルトン人守備隊長の子とし、オックスフォードに学び一一五一年聖アサフ司教に選ばれ、五二年に叙任されたが五五年に没したという略歴を解説し、つぎに当時の歴史叙述やロマンスに大きな影響を与えた『列王史』の梗概

が述べられる。これはさきに評者が第一篇に関係部分を示してほしかったことを囑望したものである。

ついで『列王史』の材料をとりあげてオックスフォードの大執事ウォルターから与えられた「最古のブリトン語の書」に従って書かれたというが、実はそうしたことは考えられず、ブリトン人の間に建國をトロヤに遡らせる意向があったことから、ギリシア、ローマの歴史に関する知見を備えていた彼が、奔放な想像力と該博な知識をもって物した建國ロマンであると、さらに彼が『列王史』をグロースター伯ロバート、ステイブン王、ウースター伯ウアルラン、リンカン司教アリグザンダーら当時の政界、聖界の有力者に献呈しているところから、フランスに比肩すべきブリタニアの過去の光輝を求めていたノルマン王朝の意向に沿うように書かれたもので、作者ジェフリは自らの榮達の契機を求めていた世俗的野心家であったとされる(二二七頁)。しかしそうした彼の榮達の志向も報われずに、ロバート伯、アリグザンダー司教らは死し、やっと一一五一年に聖アサフ司教とされたものの戦乱のために任地にも行けないままで一一五五年死没したという。ジェフリ・オブ・モンマスの悲願と悲運の記述も読者を魅きつけるものがある。『列王史』に対しては、何故アーサーが他の国の歴史に出て来ないのかという疑問と批判もあったが、ローマ建國史に做った英雄による創業は中世の歴史家にうけ入れられ易く、急速な流布を見て、ジェフリ・オブ・モンマスの筆名はヨーロッパの隅々にまで喧伝されることとなった。

第二章では、その『列王史』が素材となったアーサーのロマンス化が、円卓物語や宮廷の騎士道化を加えて急速に進展した背景

には、正統性にもとづく權威を持っていたフランス・カペー王家に対抗して、自らの王権の適法性の獲得に苦しんでいたノルマン王朝が、シャルルマーニュに比肩するような世界的支配者をイングランドの過去に求めており、またその後登場したフランタジネット王朝ヘンリー二世も、西欧最大の君主として王権の神聖化を求めていたという、切実な現実の政治的背景があったことが強調されている。

著者は間に当時の歴史の簡潔にして適確な概説をはさんで、ジェフリーの『列王史』が如何に流布したかを論じ、荒唐無稽の史書が信じられた中世という時代の実態を強調されている。思うに、荒唐無稽を信ずる中世人の心意気、そうした中世人の生き方、世界観は、正に現実の中世人の実態であり、それが現実の中世の歴史でもある。そのように、虚構が実態を創り出してゆくところに、中世におけるロマンスと歴史、虚構と実態が交錯する所以があることを、われわれは認識せしめられるのである。

第三章では一九〇一年頃のグラストンベリ修道院でのアーサー遺骨の発掘とダンスタン時代の書体を真似た十字架の偽作という大芝居がうたれたことについて、著者は、一八四四年の大火にあい、かつバス司教との間の従属関係に悩んでいたグラストンベリ修道院が、このアーサーゆかりの地を聖地とすることにによって巡礼を集めて修道院の財政難を救い、さらにはライヴァル、カントベリーにも対抗してゆくこともしたところにあると見事な説明をされる(二七〇—二頁)。またさらに、ウェールズやブルターニュの民族的抵抗に悩んだヘンリー二世が、アーサー伝説と関連の深いグラストンベリ修道院と共謀して、アーサー遺骨の発掘を

仕組んでブリトン人の熱狂を鎮めようとしていたと興味深い推定を試みられる(二七七頁)。

その後一三世紀に入っても、アーサー伝説はエドワード一世のスコットランド、ウェールズ支配計画に大きな影響を与え、アーサー伝説が現実の政治史を動かす拠り所となっていたこと(二九〇—一頁)、またエドワード一世自身アーサー伝説の信奉者で、彼の時代の騎士道社会に様々な彩りを与えたことが指摘される(二九二頁)。

アーサー伝説はまた貴族の間にも利用された。一四世紀後半モーター家のエドモンド辺境伯が作成させたと思われる「ウィグモア文書」がそれで、モーター家がルーウェリン家と結縁してアーサーやブルートの血統に連なることとなった点が強調されており、エドワード黒太子の死後に王位継承者が幼ないリチャードのみとなった状況の中で、モーター家がイングランド、ウェールズ、スコットランド支配に血統上正当な権利のあることを示そうとした文書であったとされる。またヨーク家も、王位継承に有利な立場にあったランカスター家に対抗し、さきのモーター家との結縁を通じてブリトン王の血統に連がることをも付け加えて、自らの王位継承権をより有利にしようとしていたことが注目される。

またケンブリッジ大学が、オックスフォード大学よりも古い起源を持つことを主張して、アルフレッド大王に起源を求めるオックスフォード大学に対抗し、アーサーに起源を求めようとしたことも注目されるが、中世後期には、本来ブリトン人の象徴であったアーサーが、イギリス人の追憶すべき高名な王とされ、アーサー

のアングル化が進んできたことが強調され、イングランドにおけるアーサーのアングル化に対抗して、スコットランドに、アーサー伝説の不信を表明するスコット・ナシヨナリズムがむき出しになってきたことにも触れられる。

第四章ではテューダー時代におけるアーサー信奉をとり上げて、ヘンリー七世がウェールズ人からイングランド最後のブリトン王、アーサー帝国の復興者と讃えられて、七世自身もヨーク家のエリザベスと結婚し、ヨーク家を介してルーウェリンの家系に結びつくアーサーの後継者たることを表明し、長子にアーサーと命名したことも注目される。その期待のアーサーが死没したため、次子ヘンリー八世が立ったが、彼も亦一五三三年上訴禁止法においてローマ教会と対抗して、イングランドをローマとは別のアーサー帝国に由来させようとしており、エリザベス一世時代の海外雄飛にもアーサーに託した帝国意識が見られたとされる。しかしアーサー信奉は、その後次第に詩的装飾的なものに化してゆき革命に影響をうけて一六世紀の間にアーサー伝説に対する客観的文献批判が次第に強まって来、ブルート・トロヤ起源の否定、ブリトン人とアングロ・サクソン人との識別などアングロ・サクソン研究が盛んに行なわれるようになったからで、革命の中で、王権を神や英雄に起源させる考え方が後退し、ジェフリ・オブ・モンマスの著作が王家没落の説明に使用されるに及んでアーサー伝説は命脈を断ち、革命後は人びとのファンタジーの世界にのみ生き続けることとなったと結ばれている。

ところで第三篇第三章第四節のアーサーのアングル化について、著者はアーサーがブリトン人の英雄でなくなり、全民族に通ずる英雄となり、イングランドではアーサーのアングル化が始まった(三一〇頁)とされるが、これは、ブリトン人、アングロ・サクソン人などを含めた全ブリタニアの民族をこえた英雄になったこと、すなわちイギリスの国民国家的な英雄になったことが説かれているように評者には思えるが、評者には、民族や国家の別をこえて全ヨーロッパに普及したアーサー(三〇九頁)が国民国家的英雄になったという意味で、一種の政治的貶降、アーサー像の矮小化と後退がおこったのではないかと思われた。中世末期の国民国家的発展の事情をも考えて評者はそのように理解したいが、これは誤解であろうか。評者が本書の中で唯一すっきり理解出来なかつた箇所であつた。他日著者より御教示が得られれば幸いである。

アーサー伝説は革命で終焉したが、本書にもられた著者のアーサー伝説への情熱をここで終らせてはならない。これからのイギリス中世、ヨーロッパ中世の歴史と文学の研究に本書が与える大きな波紋を期待したい。博く史料、文献を渉猟された著者の長い間の御勞苦の結晶を理解することは評者の能力を絶するものがある。著者の真意を誤まり伝えた点が多々あることを恐れるが、著者の御海容を乞う次第である。

(A5判、三六〇頁 一九八五年八月刊、岩波書店 四五〇〇円)

(関西大学教授)